

かたりべ130

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより



企画展示室の様子。くしやこうがい、かんざしなどの髪飾り（右上）、化粧品の瓶（右下）といった身近な生活道具を展示しています。

二〇一九年二月一〇日(日)まで開催中

郷土資料館では、これまで多くの方々のご寄贈などによって、数万点に及ぶ資料を所蔵しています。区内の職人の仕事道具や農家を営んでいたお家の農具、戦中戦後の様子をうかがい知れる戦災資料など、内容は多岐に渡りますが、なかでも多いのが、日常の生活で使われていた生活道具です。

このたび、当館企画展示室では、「鏡」に視点を置き、その周りで使っていた「身だしなみを整える」ための道具の変遷の展示を行っています。「磨かないと映さない鏡」、「正座をして見る鏡」、「水回りと鏡」の三つのコーナーから構成され、結髪、化粧、歯磨き、髭剃り、散髪等々、どれも生活に身近な道具を約二〇〇点ほど展示しています。展示資料

二〇一八年度企画展
「鏡の前の暮らし」
—身だしなみの道具—

は、館蔵資料と教育委員会管理の資料を中

心に、実際に豊島区内で使われていた道具たちです。展示を観ながら、自分の家ではこうだった、どのように使っていたなど、お話ししながら生活の移り変わりに伴う道具の変化をご覧いただければ幸いです。

また企画展開催中、郷土資料館・鈴木信太郎記念館・雑司が谷旧宣教師館の三館を巡るスタンプラリーも行っていただけます。三館巡るとオリジナルの缶バッジをひとつプレゼントしています。お近くにお越しの際には、是非お立ち寄りください。

(郷土 上田)



お好きな缶バッジをプレゼント！
(おしろい、くし・こうがい、バリカン)

衛生と美容の日用品④—美しい髪を保つ、櫛—

今回は企画展の開催に際しまして、展示資料の中からご紹介します。

髪を梳かすために、多くの方は日ごろヘアブラシや櫛をお使いかと思えます。ヘアブラシというのは明治時代に入ってから西洋より輸入され日本でも使われるようになったものですが、櫛の歴史はそれよりずっと長く、日本では縄文時代の遺跡からも出土しているようです。

さて、この櫛ですが、現在の櫛の主な用途とは何かと考えますと、絡んだ髪をほぐして整えたり、寝癖を直したり、あるいは髪の長い人であれば、髪を結んだりすることが目的です。基本的には、髪を梳くのも結ぶのも同じ櫛を使うことが多いのではないのでしょうか。

館蔵資料を見えますと、形や素材が大きく違う種類の櫛があるのがわかります。これらは用途によって四種類に分けることができます。

① 梳き櫛

髪についたほこりや垢、ふけなどの汚れを梳き取り、また頭皮に寄生するシラミを取り除くためにも使う櫛です。ほぼ毎日髪を洗うようになったのはそれほど



図1 梳き櫛 左の資料の軸には「ふけとり」と書かれています。

ど昔のことではありません。江戸時代には洗髪は月に一度でしたが、大正時代に入っても二週間に一度程度だったようです。そのため日常では髪と頭皮の衛生保つために非常に歯の細かい梳き櫛で汚れを梳き取っていました。

② 結い櫛

髪を結うための専用の櫛です。時代劇などで観る髪型を日本髪といえます。力士がしている髪型もその一つです。日本髪は種類が多く、構造が複雑であるため、様々な形状のものがああります。耳の上の部分髪を鬢といひ、ここをふくらませるための櫛を鬢出しといひました。歯が長

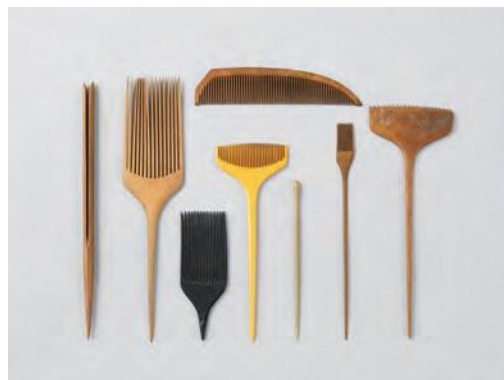


図2 結い櫛 日本髪を結うには十種類以上を使い分ける必要があった。



図3 飾り櫛 べっ甲や漆塗の櫛に珊瑚や螺鈿、蒔絵などで装飾されている。

③ 飾り櫛

いのが特徴です。これは髪飾りとして、結った髪に挿す櫛です。挿櫛ともいい、半円型をしています。女性の装飾品のため、材質や飾りなどに意匠が凝らされています。基本的

には髪飾りとして笄や簪と一緒に使われますが、ちょっと髪が乱れた時などは、飾り櫛で直したようです。

④ 解かし櫛

結っていた髪をほぐし、整えるために使われます。これまで紹介したものの中では最も歯が粗いものです。

このような種類の櫛を駆使して黒くて艶やかな髪を保ち、複雑な髪型を形作っていました。櫛はまさに、衛生と美容の両方を保つための日用品でした。



図4 解かし櫛

企画展ではこの他にも、笄や簪などの髪飾りや、昔の整髪剤である鬢水入れや香油壺といった髪を結うために使用する道具を展示しています。是非展示室で実物をご覧ください。(郷土 上田)

作品を見る読む

14

建島覚造《核と殻》

帯状に波打つ楕円の外殻の中に、左右から伸びた球状の物体があります。外殻は全体を覆い尽くすのではなく、内部を覗うことができかつ外部に通じる空間があり、それらが複雑に作用しあって、かたちが形成されています。そして、この彫刻ができてきている材料とはまた別の素材で、



図1 建島覚造 核と殻 1959年 ポリエステル・鉄
高さ69.5×幅75.0×奥行30.0cm 豊島区蔵

から五五年までの滞仏でヘンリー・ムアや同時代の青年作家たちから多くを学んだ建島が、新しい造形の積極的な展開と呼ぶ時期の制作です。
『美術ジャーナル』（一九六三年一月号）には、「作家の記録 「モニュメント」

二〇〇六）は、現在の東京都荒川区西日暮里に生まれ、一九四九（昭和二四）年から没するまで豊島区巣鴨に暮らしました。彫刻家・建島大夢（一八八〇―一九四二）の長男で、戦後日本の抽象彫刻を代表する作家として知られています。一九四一（昭和一六）年に東京美術学校彫刻科を卒業、同年の文展で特選を受賞しました。一九五〇（昭和二五）年、行動美術協会彫刻部の新設に参画。本作は一九五三年

と題した建島の文章が掲載されています。そこには一九五三年の《かほ》《はにわ》（ともに木、滞仏作）から、一九五五年《貌》（セメント）、一九五六年《核》（セメント、鉄）、本作《核と殻》（ポリエステル、鉄）、一九六一年《星

の樹2》（ポリエステル、鉄）、そして一九六二年《ORGAN》（セメント）まで一五作が掲載されています【図2】。多くの作品を掲載したのは、建島自身が、これらの作品とその展開がこの時期の制作において欠かせないものと考えていた

からでしょう。素材を変え形態も変化していますが、造形面だけではなく、作品の中に何もない空間を内包し、まるみを帯びときに突起し、有機体を思わせるこれらの作品は、建島のこの時期の特徴をよく伝えています。合成樹脂（ポリエステル）を使った早い時期の制作である本作に苦労していたようですが、『一九五九年度選抜 秀作美術展』（一九六〇年）の陳列目録でその意図を「ネガティブな空間（殻）と、その中央に位する球体（核）の相互関係、それを透過する尖線を半透明プラスチックで処理すること。」と書いています。

本作は台座が失われていたため自立できず、水平に置かれた状態で保管されていました。初出品は東京都美術館で開催



図2 『美術ジャーナル』（1963年1月号、通巻36号）より、30-31頁。（東京文化財研究所蔵）

された第一四回行動美術展であることから、当時どのように展示されていたのか、雑誌などから写真をさがしました。しかしいずれも軸から上の部分しか写っていないのです。そのため、同時期のほかの作品から類推し、作品表面の部分的な欠損とあわせて修復を行い、本作は何年かぶりに立ち上がりました。

当時の写真では、内部の球体が発光するかのように光が当てられていました。当時新素材であったポリエステル樹脂は、やわらかく光を宿していたのでしよう。同展の展覧会評で、針生一郎は本作をひとつの収穫であるとし、「内部と外部が自在に浸透しあい、マチエールに現れた光の変化がうつくしい」と言います。建島は数年おきに作品のスタイルをがらりと変化させます。池袋・東京芸術劇場には《WAVING FIGURE―波貌》という一九九〇（平成二）年の大きな作品がそびえています。高さ八メートルある本作は、凹凸面が交互に連なる鏡面仕上げで周囲を映し込みます。《核と殻》の時期に見られる多彩な制作も《WAVING FIGURE―波貌》も、虚と実の空間をあ

わせ持つという点で、作家の芯の部分は確固たるものだということを語りかけています。（美術 小林）

番外編！高田・雑司が谷の名所めぐり

当館では、豊島区地域を描いた浮世絵版画を約30点収蔵しています。描かれた場所は、主に高田・雑司が谷地域と巣鴨・染井地域に分けられます。

前者は、安産・子育ての神として知られる雑司が谷鬼子母神が参詣客で賑わい、また少し足をのばせば、下高田村の富士見茶屋からの眺望や江戸川(神田川)に架かる姿見橋・面影橋の四季折々の風情を楽しむことができました。一方後者は、中山道や染井通り沿いに植木屋が軒を連ね、庭のつつじや趣向を凝らした造り菊などで多くの花見客を集めました。ともに江戸市中から日帰りで行ける行楽地であり、江戸名所・名勝の題材として浮世絵に多く描かれたのです。

特に前者は、菊岡沾涼著『江戸砂子』(享保一七・一七三二年)や俳諧絵巻『武蔵国雑司谷八境』に雑司が谷の八名所が詠まれ、また金子直徳編『富士見茶屋』(年不詳)では「高田十二景」と「高田続十三景」の計二十五の史跡名勝が詠まれるなど、多くの俳人や文人たちが愛でた景勝地でもあったのです。

当館では、昨年一〇月のリニューアル

オープンを記念して、人気の高い浮世絵八点を絵葉書にして販売しています(一枚百円)。

今回は高田・雑司が谷地域の四点を紹介します。①は鬼子母神参道の大門「茗荷屋」の賑わいを描いています。右側の参詣帰りの一行は、土産の角兵衛獅子を前にぶら下げ、疲れた様子の男の子の手を引いて歩かせようとしています。左側の子どもは、土産のすすきみみずくを肩にかけ、その様子を見ている微笑

ましい光景です。

②は二人連れの女性が十月の鬼子母神の御会式の帰りに富士見茶屋「珍々亭」(現学習院構内)に立ち寄り、休憩しています。雪を被った富士山と夕日に染まる空、一面に広がる黄金色の稲穂の眺めは素晴らしかったことでしょう。参詣土産の五色の風車も描かれています。

③は②と同じ晩秋の高田地域を南側から俯瞰したものです。江戸川に架かる姿見橋と、その奥には面影橋と氷川神社・南蔵院が見えます。この付近は「砂利場」と呼ばれ、一面に広がる田圃は「氷川田んぼ」として有名でした。

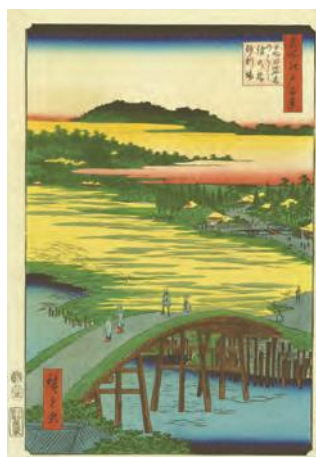
④は虫かごを手にする女性の背景に、広重筆の高田姿見橋が描かれています。「高田十二景」にも「影橋の流蜚」が詠

② 東都名所年中行事 十月雑司かや会式参り
初代歌川広重 安政元(一八五四年)



まれ、「江戸名所図会」(天保七・一八三六年)には「落合蜚」と題し、蜚狩りを楽しむ多くの家族連れが描かれており、高田地域の夏の風物詩でした。

③ 名所江戸百景 高田姿見のはし橋の橋砂利場
初代歌川広重 安政四(一八五七年)



④ 東都四季名所尽 高田姿見橋
三代歌川豊国、二代歌川広重 文久三(一八六三年)



現在ではこれらの景観を眺めることはできませんが、絵葉書を手に高田・雑司が谷地域を散策すると、当時の面影を垣間見ることができるともいえるかもしれません。

(参考) 葉師寺君子「豊島区地域における江戸の名数景勝地について」、『豊島区域と浮世絵』『生活と文化』第11号、第12号。

(郷土 横山)



① 江戸高名会亭尽 雑司ヶ谷之図 初代歌川広重 天保中期(1835~40年頃)

セピア色の記憶

第34回 巢鴨の賑わいは菊見客から始まった!?

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した一九六八年二月と現在（二〇一八年一月撮影）の豊島区巢鴨一・二丁目巢鴨駅前付近の様子です。地図に示した*印は撮影地点を、↓印は撮影方向を示しています。上の写真撮影時は、まだ都電が活躍していた頃で、架線の多さが目立ちます。また、「巢鴨車庫前」停留場手前側の軌道が左方向へ折れていますが、これはそのまま直進すると都電巢鴨車庫（現都営バス巢鴨営業所）となる位置関係になります。



さて、撮影地点から北西方向へは旧中山道（現巢鴨地藏通り商店街がある通り）が走り、街道沿いには眞性寺、高岩寺（とげぬき地蔵）、巢鴨庚申塚といったランドマークが所在しています。こうした巢鴨の名所の集客力は今なお健在ですが、かつて江戸時代後半にはこれに勝るとも劣らないイベントが巢鴨とその周辺地域にはあり、抜群の集客力を誇りました。すでに季節は過ぎすなわちこの地域で営業をしていた植



木屋たちによる菊づくりです。一九世紀前半成立の『遊歴雑記』には、巢鴨の菊づくりは元文・寛保年間（一七三六〜四四）に七・八軒の植木屋が始め、花壇づくり↓高作り↓咲き分けの菊などを経て、文化八・九（一八一・一二）年頃から動物や風景を菊花で表現する形づくりが出てきたとされています。人目を惹く形づくりには、見物客が大勢押し寄せ、巢鴨はもちろん染井（駒込三・六・七丁目あたり）、伝中（駒込一丁目）、千駄木といった現在の豊島区から文京区にかけての一带が賑わい、



流行菊の花揃 巢鴨植木屋弥三郎 弘化二年
菊花で造った富士山と鶴を覗てその出来栄に驚いている人々の様子を描いたもの

相当の経済効果もあったようです。

巢鴨の近隣雑司ヶ谷地域に居住した幕府御鷹方の役人が記した随筆『寝ぬ夜のすさび』には、弘化二（一八四五）年の賑わいについて、菊花が完全に咲いていないうちから客が出て、飲食店がにわか営業を行い対応していること、関東はもとより東北方面からも旅度をして見物に訪れる客がいる噂さえあることなどが記されています。現在の巢鴨地藏通りの賑わいは、菊見客から始まったのかも知れません。なお、菊花による形づくりの手法は、後年一大ブームとなる団子坂（現文京区千駄木二・三丁目）の菊人形制作へと継承されていきます。

また、平成五（一九九三）年に始まり、今なお続く「すがも中山道菊まつり」は、ここまで記してきた江戸時代の巢鴨の菊づくりになんだものです。（郷土 秋山）

旧鈴木家住宅は一九四八（昭和二三）年の座敷棟移築によって、現在の三棟構成が完成します。以降も書斎棟二階の再建をはじめとする増改築工事等が行われますが、特に北側の台所を中心とした水回りは、幾度かの増改築工事によって姿が変わっています。

最初の増築は一九五三（昭和二八）年で、座敷棟三畳間の北側への拡張と三畳間の増築でした。この工事は、三畳間を北側へ四尺半（約一三六四㎜）拡張して

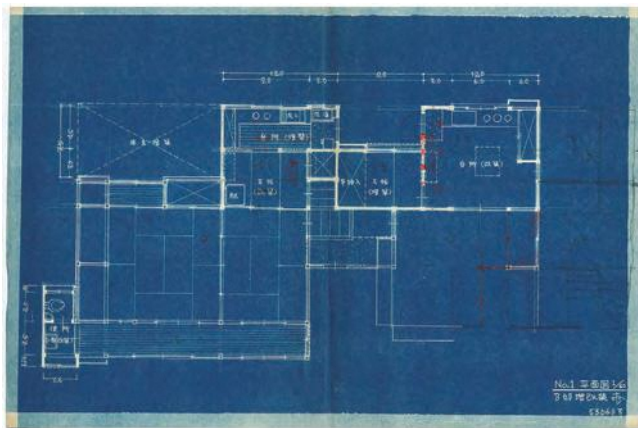


図1 1953年増改築工事平面図

板敷の台所（現旧台所2）を増築すると共に既存台所（現事務室・旧台所1）との間に三畳間（現旧ユーティリティ）の女中室を増築するもので、既存台所も勝手口の位置が北側へ移り、流し台とコンロが北側へと変更されています。

また、座敷北側に破線で「将来増築」の記載が見られ、増築が検討されていたことが分かります。しかし、この部分への増築は行われず、どのような計画があったか、定かではありません。一九七六

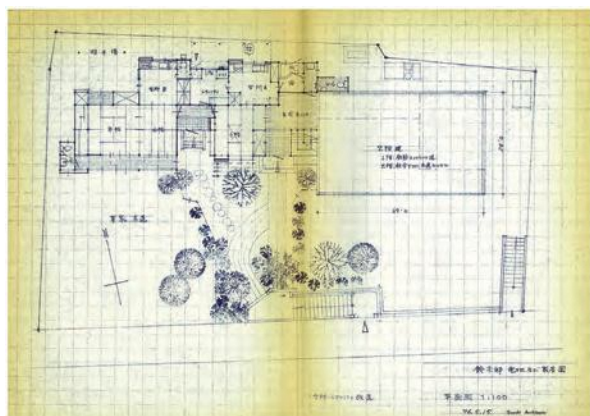


図2 1976年増改築工事平面図

（昭和五二）年で、三畳間の女中室を北側に三尺拡張しています。増築後は北側に洗面流しと洗濯機を設置し、ユーティリティとして使用します。

この拡張に伴い、以前洗濯機を設置していた三畳間と台所2の間へ貯湯式湯沸器が設置され、台所1の勝手口は取り除かれています。しかし、二〇一七（平成二九）年に行われた保存改修工事で壁を剥がしたところ、勝手口の扉が壁の中に残されていたことが分かりました（図3 右手の扉）。この扉は除去せず、再び壁の中に埋め戻しました。

こうした北側三室は、記念館開館に向けた保存改修工事の際、非公開の事務室等への改装が行われ、現在は当時の姿を確認することはできません。しかし、その他の公開部分については、創建当初の姿をよく残しています。（郷土 木下）



図3 旧勝手口扉

編集後記

「かたりべ」一三〇号をお届けいたします。

近年では電車の乗客のほとんどがスマートフォンを操作しているのではと思われるのですが、スマホを使って何をしているかは人によって読書、ゲーム、連絡、仕事など様々です。しかし電源を切ってスマホ自体だけを見てしまえば、ほとんどが似たり寄つたりの小さな板で、メーカーや機種による違いしか判りません。

資料館にある資料も同じようなことがいえます。一見似たような道具でも何のためにどのように使っていたかは千差万別です。資料のみが重要なのではなく、どういった人がどんなふうに使っていたのかという情報が、その時代・地域の歴史と文化を示すうえで大変大事なこととなっていきます。

いずれ何十年もたってスマホが博物館資料になるころには、みなさんが今何のアプリを使っているか、そういういった情報が貴重になるかもしれません。（編集 上田）



東アジア文化都市2019 豊島
Culture City of East Asia 2019 Toshima
はらりべ 文化がいっぱい

かたりべ
No.130

2018年12月14日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階

電話 03-3980-2351
URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan>